

苦しいからこそ

中国・四国ブロック代表

J A高知県青壮年部春野本部 大庭 啓太

苦しいからこそ地域の中へ！

私が農業をしていく中で、心がけていることです。

私は高知県で胡瓜を栽培している、新規就農者です。サラリーマン家庭出身の3児の父で、おっぱいの大きな嫁が自慢の31歳です。こう言うと、私が陽気で人前に出ていくことが好きだと思われるでしょう。ですが、もともとは真逆で人付き合いが苦手。産まれて23年間彼女もいたことが無く、街へ飲みに行く事も無いような、かなり控え目な性格でした。

そんな性格が災いし、農大卒業後に県外で就職したものの上手いかず、わずか1年と少しで軽い引きこもりになりました。

こんな私が高知県で就農し、なぜ積極的に地域の中へ入っていくようになったのか。今日するのは、そんな話です。

引きこもりがちになった私は、逃げたと思われることが恥ずかしくて、「農業したいから仕事をやめる」と言って、高知に帰ってきました。

そんな理由で戻ってきたもので、伝手もなければ貯金もない。さあ、どうしたらいいものかと悩んでいると、運よく農大時代の友人に農協へ繋いでもらい、高知県で胡瓜の旗振りをしている農家のもとへ研修に行けることになりました。

その人こそ、私の師匠です。

研修初日、新しい環境が不安だった私に師匠はまず言いました。

「大庭君、彼女を作りなさい」

全く予想外の言葉で戸惑う私に師匠はニカッと笑い、

「俺に任しちゃあ〜色々連れてっっちゃうわやあ〜」と。

——この人に付いていこう！ 就農を決めた瞬間でした。

はっきり言います。就農の決め手は下心でした！

その言葉通り、街にいくたびに色々な人生経験をさせていただきました。

結果的に自慢の嫁と出会うことが出来たので、この時の下心はいい仕事をしたと思います。

師匠にお世話になったのは、それだけではありません。特に感謝していることの一つが青壮年部への紹介です。ですが、初めからそう思っていたわけではなく、強引な先輩たちに半ば無理やり連れていかれる行事や遊びに戸惑い、苦痛に感じることもありました。

それでも、師匠の顔を立てるためにこの場に居続けたことが、後に自分を救ってくれることになりました。

そうして月日が流れ、家庭を築くことができ、そろそろ独立をしてみたいと思うようになりました。ですが、すぐに独立することはできませんでした。現在、整備されている新規就農者への独立支援の制度が、整備前に研修を始めた私には適用されなかったためです。

そのため、自力で独立先のハウスを見つけなくてはなりませんでしたが、個人で動いても大きな進展はなく、そのまま3年が経ってしまいました。

そうして研修も6年目に入ったある日のことです。師匠から『研修のれん分け』制度の提案を受けました。『研修のれん分け』制度とは、師匠がレンタルハウスを建てた後、弟子に譲るためにかかる名義変更などの色々な手続きに対して農協や市からのサポートを受けられ、スムーズに独立できるといふものです。

信用不足で空きハウスを利用できず、実績不足でレンタルハウスを建てることも出来なかった私にとって、それは願ってもない提案でした。ですが、この制度には弟子には初年度からレンタルハウスの大きな借金が、そして師匠には弟子の成果への責任が付いて回ります。そのためか、高知県でこの制度を利用した人はいませんでした。そんな中で師匠が提案してくれた事に大きな感謝と責任を感じ、私はこの提案を受けることにしました。

そして研修開始から8年目。ようやく念願だった独立をする事ができました！

私にとって、本当の闘いはここから始まりました。

のれん分け制度のリスクから、絶対に失敗は出来ません。ハウスは私達の栽培方法では2人分の広さでしたが、金銭的に余裕がなかった私は、初年度はこれを1人でやることを決意しました。

ですが、それは想像以上の負担でした。日の出ている時間だけでは到底間に合わず、時には日付が変わるまで作業をし続けました。そして、忙しさを理由にハウスにこもるようになり、しだいに地域の集まりにも行かなくなりました。

真冬の夜のハウスは低温な上に湿度が高く、ダウンジャケットを着ていても底冷えします。

真っ暗な中、ヘッドライトで手元を照らしながら、長い畝の終わりを目指して作業をします。

耳に付けたイヤホンからは、radiko で聴いているラジオの音がします。それがふと途切れた時、しん、と何とも言えない静けさが、心に重くのしかかる時間があります。

念願かなっての独立のはずでした。それなのに、あまりにも忙しい日々の中で心は重く、暗く、冷えていって、仕事から逃げ出したあの頃へと戻ってしまいました。

少し手を抜こうかな……。明日くらいは休んでもいいんじゃないかな……。

……。世話さえ止めてしまえば、楽になるんじゃないかな。

そんなことを思い始めた頃です。

「やりゆうかや〜」と、声がしました。振り返ってみると、青壮年部で一緒だった2つ年上の先輩が立っていました。片手にはライトの付いたスマホを持って、もう片手には缶コーヒーを2本持って。時間を見ると、もう夜の9時を過ぎていました。

「暇やき遊びに来たちや〜」

そう言うと、持っていたコーヒーを1本、渡してくれました。

思えば、誰かとゆっくり話をしたのは久しぶりのことでした。

この日、私の仕事が終わるまで他愛のない話をして、最後に一緒にもらったコーヒーを飲みました。ホットというにはぬるくなっていましたが、この時のコーヒーの温もりを、私は一生忘れることはないと思います。

それからというもの先輩がよくハウスに顔を出してくれるようになり、ゆっくり話をする時間を私にくれました。やがてそんな先輩に誘われて、ご無沙汰になっていた青壮年部にもまた顔を出すようになりました。

行ってみると、しばらく参加してなかったことを責められることもなく、「大変やねや〜」「よう頑張ろう！」と声をかけてくれました。

あのまま、ハウスに一人でいたら気づけなかったでしょう。色んな人が、私を見ていてくれたということに。

そのことに気付いてからは、忙しい中でも、積極的に地域の活動へ参加するようになりました。

すると、先輩のほかにも色んな人がハウスに顔を出してくれるようになりました。毎日誰かと笑いながら仕事をして、たまに早く終わると、一緒に笑いながらご飯を食べに行きました。

それは、これまでとは全く違った仕事風景でした。

そうして、気が付くと目標にしていた6月になっていました。

最後までやり遂げることができたんです。しかも、笑いながら。

「ようやくっ！」

そんな私に、師匠も笑ってくれました。

2作目となった前作では収穫量も上がり、更に質のいい胡瓜を作る事が出来ました。

そして、今作からは妻と一緒に仕事が出来るようになり、労働力にも余裕が持てました。

これからは仕事だけではなく、家族での笑っていく時間も増やしていけるよう頑張っていきます。

昔、1人でふさぎ込んで逃げるように仕事を辞めました。そんな私が今の仕事を続ける事が出来ているのは、地域に仲間が出来て、支えてくれているからです。

青壮年部や地域の活動が、そんな仲間を作ってくれました。だから私も、地域のために活動をしたい。そう思い、ある事を始めました。

新規就農者への声掛けです。青壮年部へ誘ったり、定植やビニール張りなど「一緒にやらんかえ！」と声を掛けるようにしています。今では地域の行事などにも一緒に参加するようになり、地元との繋がりも作りやすくなってきました。

お節介だと思われる方もいるでしょう。私も最初はそうでしたし、集団だからこそその煩わしさもあることは確かです。ですが、それでも。必ず悩みや壁にはぶつかります。だからこそ、私は声をかけ続けていきます。

苦しいからこそ、地域の中へ！

私たちは1人じゃないんです、と。